

入学者選抜方法と学業成績・能力向上

西丸 良一

1 はじめに

本研究は、同志社大学社会学部を事例に、各学生の入学時に利用した選抜方法と学業成績や能力向上に差があるのかを検討する。

大学に入学する際の選抜方法は、大学進学の大衆化にともない、多様化する傾向にある。西群（2011）の研究があるように、選抜方法と入学後の学業成績の関連を検討する大学は多いようだ。同志社大学社会学部においても、過去に西丸（2010）が、選抜方法と学業成績の関連を検討している。この研究によると、一般・センター入試を経て入学した学生と推薦入試を経て入学した学生との間に、学業成績の差はみられないことが示されている¹。こうした研究は、多様化する選抜方法が妥当か否か、学力選抜以外の方法で入学してきた学生は、留年・退学せず規定の修業年数内で必要単位を修得し、大学を卒業することが可能か否かを検討することを目的としているのであろう。

しかし、学業成績の良し悪しのみで、選抜方法の妥当性は測定しきれない。なぜなら、大学の学業成績は、学生の能力向上そのものをあらわしているとはいえないからだ。大学における学業成績の評価は、各授業の形式によってさまざまである。授業開講期間において何らかの知識・能力を養い、それをを用いてテスト・レポートに取り組みせ、その結果のみで学業成績の評価をおこなう授業がある一方、授業へ出席すること自体を得点化し、学業成績の評価としているものもある。基本的に、どの授業を履修するかは学生の自主性にまかされているため、学生は負担の多い授業を避けることが可能である。こうしたことを踏まえれば、学業成績だけで選抜方法の妥当性を判断することは、やや不十分だといえる。

そこで本研究は、学業成績以外に「能力向上」の指標も使用し、選抜方法の妥当性を検討する。本研究で用いる「能力向上」は、調査票を通した各学生の主観に頼る指標によって構成されているため、もちろん客観性に乏しい。ただ、大学教育において養われる能力を客観的に測る方法が、現段階において、多く存在するとは思えない。特に、金（2011）のあつかった「論理的思考・説明能力」といった大学教育においてもっとも中心的に養われる能力を客観的に測定することは、おそらく不可能であろう。

しかし、こうした主観にまかせる能力向上の指標は、卒業後の進路満足度を規定する。

¹ こうした結果となる要因に、西丸（2010）は推薦入学を経て入学した学生が、一般・センター入試を経て入学した学生より、まじめに講義に取り組んでいること、推薦入学を経て入学した学生に、女性が多いことを挙げている。分析に用いたデータは、2009年3月の卒業式に同志社大学社会学部の卒業生を対象におこなわれた調査によるものである。

多喜（2012）は、「論理的思考能力の向上」が進路先満足度を規定することを示す²。多くの大学生は、短期的な就職活動を通して、漠然とした仕事のイメージと現実のズレを埋めなければならない。このズレが埋まらないまま就職先を決定してしまうと進路先満足度は低く、うまく埋めることができれば、進路先満足度は高くなる。論理的思考能力はそうしたズレを埋めることに貢献していると多喜は述べる。

こうした研究を踏まえると、学業成績と同様に、能力向上も選抜方法の妥当性を測る上で重要な指標と考えられよう。

2 データ

2.1 学業成績（GPA）について

本研究で使用するデータは、2012年3月21日の卒業式に同志社大学社会学部の卒業生を対象におこなわれた調査から得られたものである。

学業成績はGPAを使用する。GPAの平均値は、各分類の中心値から算出した（「1.49未満」は1.25、「1.50-1.99」は1.75、「2.00-2.49」は2.25、「2.50-2.99」は2.75、「3.00-3.49」は3.25、「3.50以上」は3.75へと数値化し、算出した。以下、「GPA平均値」はすべてこれをもとに算出されている）。

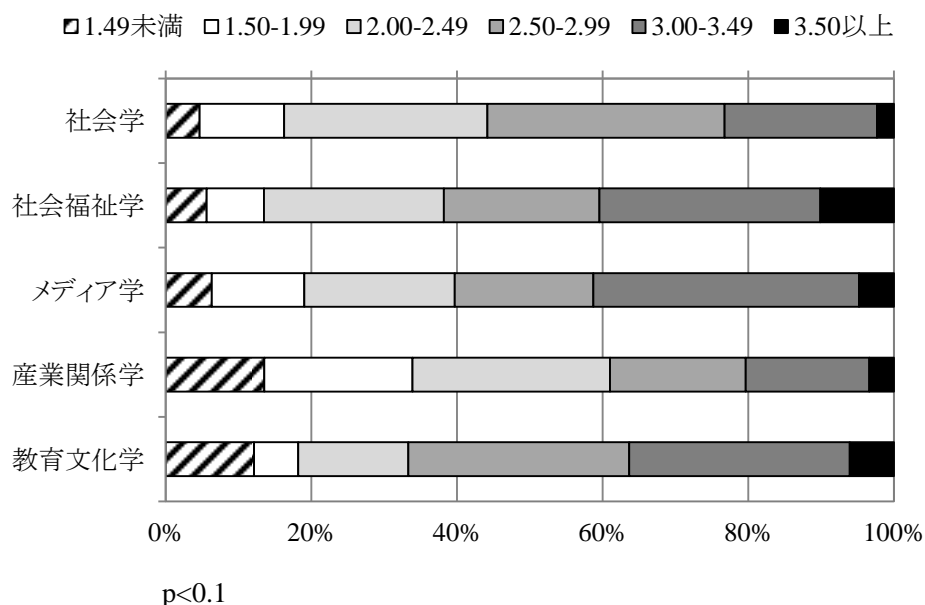


図1 学科×GPA

² 分析に用いたデータは、2009年3月・2010年3月・2011年の3月の卒業式に同志社大学社会学部の卒業生を対象におこなわれた調査データを、合併したものである。

表1 学科ごとの GPA 平均値

| | 平均値 | 標準 偏差 | N |
|-------|-------|----------|-----|
| 社会学 | 2.552 | .575 | 86 |
| 社会福祉学 | 2.716 | .669 | 89 |
| メディア学 | 2.655 | .677 | 63 |
| 産業関係学 | 2.326 | .694 | 59 |
| 教育文化学 | 2.644 | .715 | 33 |
| 合計 | 2.585 | .667 | 330 |

p<0.01

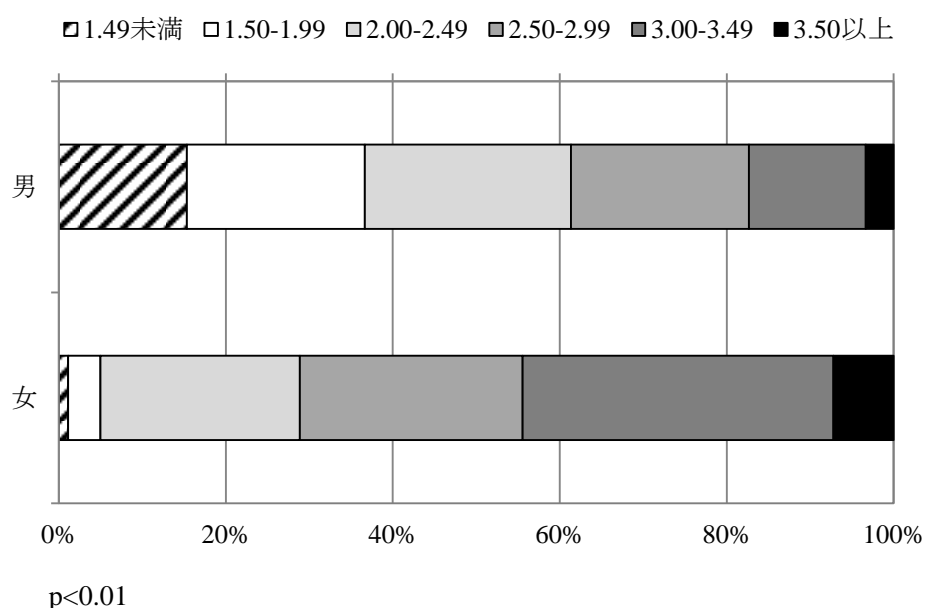


図2 性別×GPA

表2 性別ごとの GPA 平均値

| | 平均値 | 標準 偏差 | N |
|----|-------|----------|-----|
| 男 | 2.287 | .691 | 150 |
| 女 | 2.833 | .532 | 180 |
| 合計 | 2.585 | .667 | 330 |

p<0.01

図1は学科ごとにGPAの分布を示したものの、表1は学科ごとにGPAの平均値を示したものである。これらをもみてもわかるように、学科によってGPAの分布は大きく異なる。もっとも高いGPAとなっているのは社会福祉学科であり、もっとも低いGPAとなっているのは産業関係学科である。

図2は性別ごとにGPAの分布を示したものの、表2は性別ごとにGPAの平均値を示した

ものである。男性の GPA は「1.49 未満」に約 15%存在していることからわかるとおり、GPA の平均値は女性の方で約 0.6 高いことが示されている（表 2）。

2. 2 能力向上について

本研究で使用する「能力向上」の指標は、「①根拠を示し簡潔に書く」「②自分の考えや意見を伝える」「③1つのことを複数の視点から考える」「④文献・資料を読み解く」「⑤文献・統計資料を探す」「⑥数量的に分析する」「⑦外国語のスキル」に対し、それぞれ「向上した～低下した」の 4 段階で回答されたものを合算し、7 で除したものである（ α 係数 = .793）。表 3 は、能力向上の指標を構成する各変数間の相関係数を示している。

表 4 は各学科の能力向上の平均値をあらわし、表 5 は性別ごとの能力向上の平均値をあらわす。学科のなかでもっとも能力の向上がみられるのは産業関係学科である。これは、表 5 で確認できるが、女性にくらべ能力向上の高い男性の比率が産業関係学科に多いといった、学科ごとの性別の構成比率（付表 1 参照）が影響しているのではないかと考えられる。

表 3 能力向上をあらわす変数間の相関係数

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ |
|-------------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| ①根拠を示し簡潔に書く | | | | | | |
| ②自分の考えや意見を伝える | .675 ** | | | | | |
| ③1つのことを複数の視点から考える | .479 ** | .480 ** | | | | |
| ④文献・資料を読み解く | .446 ** | .359 ** | .453 ** | | | |
| ⑤文献・統計資料を探す | .476 ** | .347 ** | .322 ** | .647 ** | | |
| ⑥数量的に分析する | .385 ** | .227 ** | .235 ** | .401 ** | .424 ** | |
| ⑦外国語のスキル | .337 ** | .236 ** | .178 ** | .242 ** | .161 ** | .380 ** |

**p<0.01

表 4 学科ごとの能力向上平均値

| | 平均値 | 標準偏差 | N |
|-------|-------|------|-----|
| 社会学 | 3.003 | .419 | 86 |
| 社会福祉学 | 2.918 | .525 | 89 |
| メディア学 | 2.981 | .427 | 68 |
| 産業関係学 | 3.128 | .541 | 59 |
| 教育文化学 | 3.094 | .399 | 35 |
| 合計 | 3.008 | .475 | 337 |

p<0.1

表 5 性別ごとの能力向上平均値

| | 平均値 | 標準偏差 | N |
|----|-------|------|-----|
| 男 | 3.056 | .493 | 155 |
| 女 | 2.966 | .455 | 182 |
| 合計 | 3.008 | .475 | 337 |

p<0.1

3 分析

3.1 選抜方法と学業成績（GPA）

まず、選抜方法と学業成績の関連を検討しよう。図3は選抜方法ごとにGPAの分布を示したもの、表6は選抜方法ごとにGPAの平均値を示したものである。これらを見る限り、もっとも高いGPAを修得しているのは、編入学、留学生や社会人入試を経て入学してきた学生をあらわす「その他」である。次いで、同法人内の各高校から推薦で入学した「内部推薦」の学生、学力による選抜で入学した「一般・センター」、指定校やスポーツ推薦、AO入試で入学した学生をあらわす「推薦入学」の順となる。分散がもっとも大きいのは、表6で示されているように、推薦入学の学生である。これは、図3のGPAの分布からも判断できる。こうした結果は、推薦入学がAO入試、指定校などのさまざまな選抜方法で構成されていることによるものであろう。

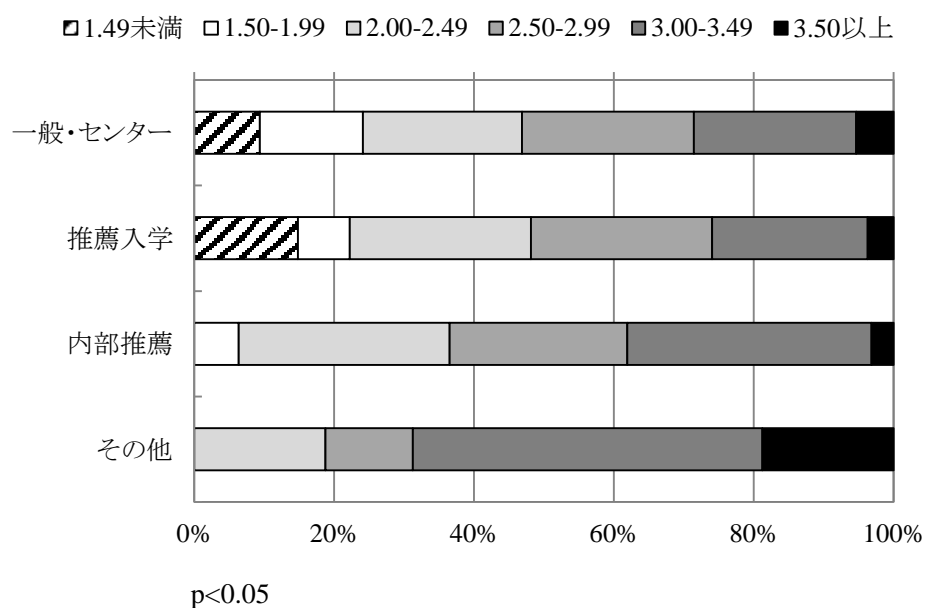


図3 選抜方法×GPA

表6 選抜方法ごとのGPA平均値

| | 平均値 | 標準偏差 | N |
|---------|-------|------|-----|
| 一般・センター | 2.518 | .689 | 224 |
| 推薦入学 | 2.472 | .712 | 27 |
| 内部推薦 | 2.742 | .512 | 63 |
| その他 | 3.094 | .507 | 16 |
| 合計 | 2.585 | .667 | 330 |

p<0.01

表 7 授業に対する各取り組みと GPA の相関係数

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ |
|----------------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|--------|
| ①GPA | | | | | | | | | |
| ②教員に質問 | .216 ** | | | | | | | | |
| ③ディスカッション | .190 ** | .627 ** | | | | | | | |
| ④予習・復習 | .212 ** | .508 ** | .374 ** | | | | | | |
| ⑤ゼミ発表の準備 | .233 ** | .282 ** | .330 ** | .340 ** | | | | | |
| ⑥卒論頑張った | .134 * | .177 | .265 ** | .199 ** | .620 ** | | | | |
| ⑦テスト・レポートの準備 | .272 ** | .333 ** | .353 ** | .403 ** | .461 ** | .490 ** | | | |
| ⑧夢中になった授業 | .172 ** | .398 ** | .408 ** | .280 ** | .310 ** | .268 ** | .403 ** | | |
| ⑨興味より成績を重視した履修 | -.132 * | -.032 | -.009 | .103 † | -.063 | -.018 | -.012 | -.154 ** | |
| ⑩遅刻・欠席 | -.347 ** | .030 | .012 | -.111 * | -.081 | -.015 | -.152 ** | -.004 | .096 † |

**p<0.01 *p<0.05 †p<0.1

※授業に対する各取り組み方 (②～⑩) 「あてはまる : 4～あてはまらない : 1」

次に、GPA に対する他の要因を検討しよう。高い GPA につながる他の要因として、学生の授業に対する取り組みが挙げられる。ここでは GPA と学生の授業に対する各取り組みを相関係数でみていこう。

分析結果である表 7 をみると、「①GPA」に対し、授業に対する各取り組みをまじめにおこなっていればいるほど、高い GPA につながる事がわかる。とくに GPA と「⑩遅刻・欠席」との相関係数は高く (-.347)、遅刻・欠席が少ないほど GPA は高くなる事が示された。また興味深い結果としては、「⑨興味より成績を重視した履修」をおこなうほど、GPA は低くなっている。おそらく、そもそも大学で提供される教育に無関心であるため、高い GPA を修得するといった意味ではなく、低い GPA でも卒業に必要な単位さえとればよいという意味で成績を重視した履修をおこなったということを示しているであろう。

では、こうした要因をコントロールしても、選抜方法と GPA との関連は示されるのだろうか。次に GPA を従属変数とした重回帰分析を用いて検討していこう。その際、授業に対する各取り組みを独立変数として用いるわけだが、表 7 に示されたとおり、「②教員に質問」と「③ディスカッション」の相関係数 (.627) と「⑤ゼミ発表の準備」と「⑥卒論頑張った」の相関係数 (.620) は高い。そこで、重回帰分析において用いる際、これら変数は合算し、2 で除した合成変数を用いることとした。

表 8 が分析結果である。モデル 1 は、選抜方法、学科、同志社大学が第一志望であるか否か³を独立変数としたものである。選抜方法のなかで、もっとも高い GPA を修得しているのは「その他」であり、次いで「内部推薦」となっている。推薦入学の学生は、基準である一般・センターで入学した学生とほぼ GPA に差はないことが示された。学科は、社会学部を基準としたが、産業関係学科がもっとも低い GPA であることが示されている。こうしたことは、図 1・表 1 と図 3・表 6 で示された分析結果とほぼ同じである。

³ 第一志望であるか否かは、入学後の修学に大きな影響を与える可能性が高い。GPA との関連は、付図 1・付表 3 を参照されたい。

表 8 GPA を規定する要因（標準化係数）

| | モデル1 | モデル2 | モデル3 | モデル4 |
|---------------------|---------|----------|----------|----------|
| (基準:一般・センター) | — | — | — | — |
| 推薦ダミー | .010 | -.079 | -.042 | -.114 * |
| 内部ダミー | .160 ** | .085 | -.050 | -.006 |
| その他ダミー | .183 ** | .095 † | .115 * | .051 |
| (基準:社会学) | — | — | — | — |
| 社会福祉ダミー | .102 | .072 | .062 | .038 |
| メディアダミー | .026 | -.052 | .041 | -.026 |
| 産業関係ダミー | -.118 † | -.155 ** | -.071 | -.113 * |
| 教育文化ダミー | .025 | -.023 | .001 | -.031 |
| 第一志望ダミー | -.085 | -.080 | -.096 † | -.088 † |
| 教員に質問・ディスカッション | | .152 * | | .163 ** |
| 予習・復習 | | .035 | | .023 |
| ゼミ発表の準備・卒論頑張った | | .080 † | | .020 |
| テスト・レポートの準備 | | .096 | | .090 |
| 夢中になった授業 | | .003 | | .029 |
| 興味より成績を重視した履修 | | -.073 | | -.040 |
| 遅刻・欠席 | | -.335 ** | | -.309 ** |
| 男性ダミー | | | -.369 ** | -.313 ** |
| 調整済み R ² | .063 | .243 | .176 | .320 |
| N | 321 | | | |

**p<0.01 *p<0.05 †p<0.1

モデル2は、モデル1に対し、授業に対する各取り組みを独立変数として加えたものである。「教員に質問・ディスカッション」をよくする学生ほど高いGPAを修得すること、「ゼミ発表の準備・卒論頑張った」学生ほど高いGPAを修得すること、「遅刻・欠席」が少ない学生ほど高いGPAを修得することが示されている。GPAに対する選抜方法の効果に目を転じると、モデル1で確認された内部推薦とその他の効果は、弱まることが確認できる。また推薦入学の効果も負に転じている。こうした結果があらわすことは、推薦入学、内部推薦、その他で入学した学生は、授業に対する取り組みが一般・センターで入学した学生よりもまじめであることによって、GPAを修得していたということだ。

モデル3は、モデル1に対し、性別を独立変数として加えたものである。性別をあらわす「男性ダミー」の効果を見ると、男性より女性の方が高いGPAを修得していることがわかる。こうしたことは、図2・表2においてもみられた結果である。また性別をコントロールすることで、産業関係学科の示していた負の効果が弱まっている。これは産業関係学科に、男性より高いGPAを修得する女性が多く在籍していることから生じたと考えられる。

選抜方法のGPAに対する効果は、モデル1のそれと比較すると、推薦入学と内部推薦は負に転じており、その他は弱まることを示す。こうしたことは、一般・センターで入学した学生よりも、推薦入学、内部推薦、その他で入学した学生のなかに、男性より高いGPA

を修得する傾向にある女性が多く存在することを示す⁴。

モデル4は、モデル1に、独立変数である授業に対する各取り組みと性別を同時に加えたものである。GPAに対する選抜方法の効果は、推薦入学で負の効果を示す。推薦入学で入学した学生は、モデル1において一般・センターで入学した学生とほぼ同じGPAであることを示したが、それはまじめに授業に取り組んでいること、女性が多いことによるものと判断できる。また、内部推薦、その他についても、モデル1では一般・センターで入学した学生より高いGPAを修得している結果を示したが、それもまじめに授業に取り組んでいること、女性が多いことによるものであった。

3. 2 選抜方法と能力向上

では、選抜方法と能力向上の関連を検討しよう。表9の分析結果をみると、もっとも能力が向上したのは、編入学や留学生、社会人入学をあらわす「その他」である。図3・表6で確認したように、その他はGPAももっとも高いことから、GPAと能力向上との間に関連があることが予想される。しかし、表10の示すとおり、GPAと能力向上との間に関連はないようだ。

表9 選抜方法ごとの能力向上平均値

| | 平均値 | 標準 偏差 | N |
|---------|-------|----------|-----|
| 一般・センター | 2.998 | .491 | 231 |
| 推薦入学 | 3.122 | .455 | 27 |
| 内部推薦 | 2.945 | .430 | 62 |
| その他 | 3.193 | .374 | 17 |
| 合計 | 3.008 | .475 | 337 |

n.s.

表10 GPAごとの能力向上平均値

| | 平均値 | 標準 偏差 | N |
|-----------|-------|----------|-----|
| 1.49未満 | 3.097 | .637 | 25 |
| 1.50-1.99 | 2.903 | .429 | 37 |
| 2.00-2.49 | 2.998 | .478 | 76 |
| 2.50-2.99 | 3.018 | .444 | 80 |
| 3.00-3.49 | 2.982 | .495 | 85 |
| 3.50以上 | 3.238 | .422 | 18 |
| 合計 | 3.009 | .482 | 321 |

n.s.

⁴ 選抜方法と性別の関係は、付表2を参照されたい。

表 11 能力向上を従属変数とした重回帰分析（標準化係数）

| | モデル1 | モデル2 | モデル3 | モデル4 | モデル5 |
|---------------------|--------|---------|--------|----------|----------|
| (基準:一般・センター) | — | — | — | — | — |
| 推薦ダミー | .090 | .058 | .108 † | .079 | .079 |
| 内部ダミー | -.022 | -.063 | .013 | -.016 | -.016 |
| その他ダミー | .119 * | .067 | .141 * | .090 † | .090 † |
| (基準:社会学) | — | — | — | — | — |
| 社会福祉ダミー | -.049 | -.103 † | -.037 | -.087 | -.087 |
| メディアダミー | -.003 | -.069 | -.008 | -.081 | -.081 |
| 産業関係ダミー | .117 † | .109 † | .102 | .087 | .087 |
| 教育文化ダミー | .037 | -.003 | .046 | .004 | .004 |
| 第一志望ダミー | -.069 | -.017 | -.065 | -.012 | -.012 |
| 教員に質問・ディスカッション | | .292 ** | | .287 ** | .287 ** |
| 予習・復習 | | .072 | | .078 | .078 |
| ゼミ発表の準備・卒論頑張った | | .075 | | .107 † | .107 † |
| テスト・レポートの準備 | | .070 | | .071 | .071 |
| 夢中になった授業 | | .056 | | .044 | .044 |
| 興味より成績を重視した履修 | | -.140 * | | -.157 ** | -.157 ** |
| 遅刻・欠席 | | .113 * | | .100 † | .100 † |
| 男性ダミー | | | .117 † | .161 ** | .161 ** |
| GPA | | | | | .000 |
| 調整済み R ² | .021 | .218 | .029 | .236 | .234 |
| N | 316 | | | | |

**p<0.01 *p<0.05 †p<0.1

では、他の要因をコントロールした場合、選抜方法と能力向上との関連はどのように示されるのであろうか。最後に、能力向上を従属変数とした重回帰分析をおこない、これを確かめよう。使用する独立変数は、選抜方法と GPA の関連を検討した表 8 と同様、学科、第一希望か否か、授業に対する各取り組み、性別に加え、従属変数であった GPA を使用する。

表 11 が分析結果である。モデル 1 は、選抜方法、学科、同志社大学が第一志望であるか否かを独立変数としたものである。選抜方法において、もっとも能力が向上したのはその他であることが確認できる。

モデル 2 は、授業に対する各取り組みをモデル 1 に対し、追加したものである。授業に対する各取り組みにおいて、能力向上を大きく規定する変数は、「教員に質問・ディスカッション」「興味より成績を重視した履修」「遅刻・欠席」であった。他の取り組みに関しても正の効果を示していることから、基本的には、まじめに授業に取り組むことが能力の向上に欠かせないといえる。ただし、遅刻・欠席の頻度が高いほど、能力が向上する結果を示しているため、これに限って、そうした解釈はあてはまらない。

モデル 3 は、モデル 1 に、性別を独立変数として加えたものである。能力向上に対する

性別の効果をみると、女性より男性の方で能力は向上している結果が示された。その一方で、能力向上に対する各選抜方法の効果は、モデル1にくらべ、正の方向に増加している。これは、先にも述べたように、推薦入学、内部推薦、その他で入学した学生に女性が多いためである。モデル3で、男性にくらべ能力向上の低い女性の効果がコントロールされたことにより、こうした結果が示されたのである。

モデル4は、授業に対する各取り組みと性別をモデル1に加えたものである。このモデルにおける結果は、モデル2・モデル3における説明とおおむね同じであるが、あらたに「ゼミ発表・卒論頑張った」の能力向上に対する効果が確認できた。こうしたことは、少人数制であるゼミにおける発表や卒論執筆が能力向上につながっていると考えられる。

最後のモデル5は、モデル4に対し、GPAをコントロールしたものである。分析の結果、GPAは能力向上とほぼ関連しないことが確認できる。つまり、大学教育における学生の評価基準であるGPAは、各学生の能力をあらわす指標となっていないということが明らかとなった。また、さまざまな要因をコントロールしても、遅刻・欠席するほど能力が向上する結果も確認できる。おそらくこれは、高い能力向上を得た学生（もしくはもともと能力が高い学生？）は、大学における授業に多少遅刻・欠席したとしても、単位を修得することができていると考えられる。ただし、GPAと能力向上との間に関連がないことから、単位を修得した授業のGPAは、必ずしも高いとは限らないだろう。

4 まとめと課題

本研究は、同志社大学社会学部を対象に、選抜方法と学業成績・能力向上の関連を検討してきた。分析の結果、以下のように要約できる。

- ① 基本的に、各選抜方法のなかで、一般・センター入試で入学した学生のGPAがもっとも低い。その要因は、それ以外の入試で入学した学生が、授業に対してまじめに取り組んでいるため、女性が多いためであった。つまり、選抜方法とGPAの関連の一部を、授業に対する取り組みや性別が媒介しているということだ。こうしたことは、裏を返せば一般・センター入試で入学した学生は、もっとも授業に対してまじめに取り組まなくとも、単位を修得できる能力を有しているともいえそうだ。
- ② 能力向上は、編入学、留学生や社会人入試で入学した学生でもっとも向上している。また、選抜方法と能力向上の関連に対し、授業に対する取り組みなどはあまり媒介していない。
- ③ 一般・センター以外の選抜方法で入学した学生は、一般・センターで入学した学生を基準とした場合、学業成績・能力向上ともに著しく低いということはない。こうした結果から、同志社大学社会学部における選抜方法に大きな問題はないといえよう。

ただし、本研究を通して、あらたに指摘すべき問題が浮き彫りとなった。それは学業成績と能力向上にほぼ関連がないことだ。大学教育において、学生の勉学に対する評価が学業成績ならば、やはり高い学業成績であるほど、高い能力向上を得ている方が望ましいといえる。こうした結果となった要因は、本研究における能力向上の指標が主観にまかせたものであるため、うまく測定できていないことによるのかもしれない。ただし、先にも述べたが、学業成績の評価に対し、授業への出欠自体を得点化していることがこうした結果を生じさせた可能性も考えられる。表8において、GPAに対し、遅刻・欠席の頻度が大きく規定している分析結果は、そうしたことを示唆しているのかもしれない⁵。

<付録>

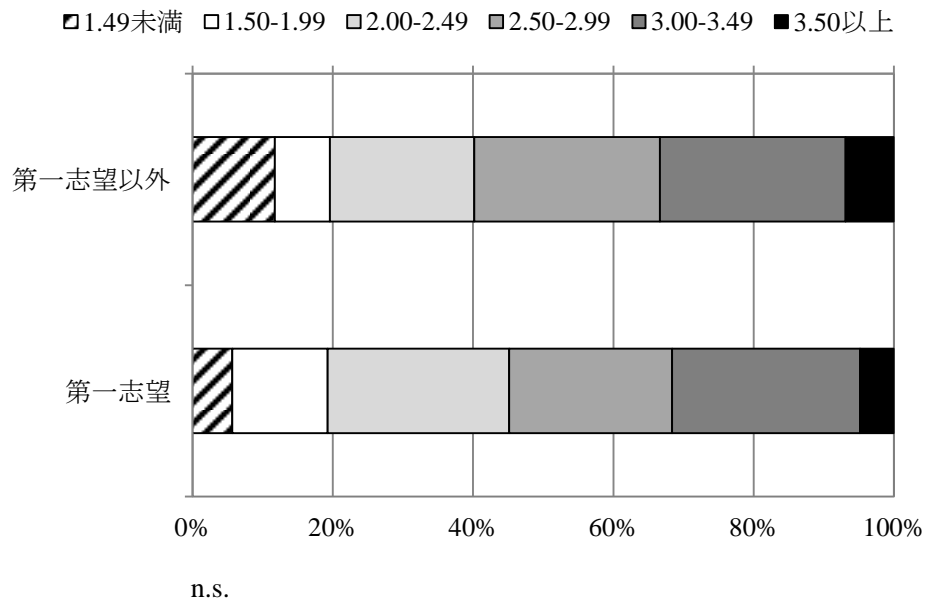
付表1 学科と性別

| | 性別 | | 合計 | N |
|-------|-------|-------|--------|-----|
| | 男 | 女 | | |
| 社会学 | 46.0% | 54.0% | 100.0% | 87 |
| 社会福祉学 | 35.1% | 64.9% | 100.0% | 94 |
| メディア学 | 48.6% | 51.4% | 100.0% | 70 |
| 産業関係学 | 64.5% | 35.5% | 100.0% | 62 |
| 教育文化学 | 35.1% | 64.9% | 100.0% | 37 |
| 合計 | 45.7% | 54.3% | 100.0% | 350 |

付表2 選抜方法と性別

| | 性別 | | 合計 | N |
|---------|-------|-------|--------|-----|
| | 男 | 女 | | |
| 一般・センター | 57.1% | 42.9% | 100.0% | 238 |
| 推薦入学 | 34.5% | 65.5% | 100.0% | 29 |
| 内部推薦 | 16.7% | 83.3% | 100.0% | 66 |
| その他 | 17.6% | 82.4% | 100.0% | 17 |
| 合計 | 45.7% | 54.3% | 100.0% | 350 |

⁵ もちろん、大学の授業における出欠確認が、まったく意味のないことだということではない。



付図 1 志望順位×GPA

付表 3 志望順位ごとの GPA 平均値

| | 平均値 | 標準 偏差 | N |
|--------|-------|----------|-----|
| 第一志望以外 | 2.593 | .714 | 102 |
| 第一志望 | 2.581 | .646 | 228 |
| 合計 | 2.585 | .667 | 330 |

n.s.

付表 4 志望ごとの能力向上平均値

| | 平均値 | 標準 偏差 | N |
|--------|-------|----------|-----|
| 第一志望以外 | 3.042 | .465 | 108 |
| 第一志望 | 2.991 | .479 | 229 |
| 合計 | 3.008 | .475 | 337 |

n.s.

<参考文献>

- 金政芸, 2011, 「大学生の論理的思考および説明能力の向上感の規定要因」『第2回 社会学部 卒業生アンケート調査報告書』同志社大学社会学部 GP 評価委員会, 1-9.
- 西丸良一, 2010, 「入学者選抜方法による大学の学業成績——同志社大学社会学部を事例に」『同志社大学教育開発センター年報』 1: 16-25.
- 西群大, 2011, 「個別大学の追跡調査に関するレビュー研究」『大学入試研究ジャーナル』 21: 31-38.

多喜弘文，2012，「大学生の進路満足度の規定要因」『第3回 社会学部 卒業生アンケート調査報告書』同志社大学社会学部 GP 評価委員会，11-23.

